	ory or readenic resources
Title	成人型・最重症アトピー性皮膚炎の中医学煎じ薬治療と,その効果判定: 成人型アトピー性皮膚炎の煎じ薬治療とその効果
Sub Title	The judgment of the effect about administered decocted Chinese herbal medicines on the adult-type, atopic dermatitis with severe skin lesion
Author	玉田, 耕一(Tamada, Koichi)
Publisher	慶應医学会
Publication year	2003
Jtitle	慶應医学 (Journal of the Keio Medical Society). Vol.80, No.3 (2003. 9) ,p.95- 103
JaLC DOI	
Abstract	We investigated the effect on six decocted Chinese herbal medicines, Seihi-to. Seihi-to with minor change (Seihi-to-kagen), Shoutu-san, Shoufu-san plus large amount of calcium sulfate. Huang's experienced regimen, and Huang's regimen with minor change in thirty patients suffered from adult-type atopic-dermatitis (AD), which is severe skin lesion spread on whole surface of the body. One adequate Chinese herbal medicine was selected by Oriental Medicine based analysis method for each patient. We chose the AD score to estimate the effect of each Chinese herbal medicine, The AD scores were recorded everyday by each pabent and the AD scores before administration of Chinese herbal medicine and those of after administration were compared respectively. The AD scores reduced to below one-second within six months in 6 out of 11 cases(54.5%) with the treatment of Seihi-to, in 6 out of 6(100%) with Seihi-to-kagen, in 1 out of 2 (50%) with Shoufu-san, in 10 out of 14(71.4%)with Shoutu-san plus, in I out of I (100%)with Huang's regimen and in 8 out of 9(88.9%)with Huang's changed regimen. Finally, skin lesions of 26 out of 28 cases(92.9%)were significantly improved and the dosage of steroid significantly decreased in twenty seven cases(96.4%). Those findings suggested that the adequate Chinese herbal medicines by Oriental Medicine based analysis method might be positively useful as a combination medicine with steroid ointment for anti-severe, hard-to-cured AD.
Notes	原著
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069296-20030900-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

原 著

成人型・最重症アトピー性皮膚炎の中医学煎じ薬治療と、その効果判定 -成人型アトピー性皮膚炎の煎じ薬治療とその効果-

東京都立大久保病院 東洋医学科

玉田耕一

(平成15年4月7日受付)

ABSTRACT

The judgment of the effect about administered decocted Chinese herbal medicines on the adult-type, atopic dermatitis with severe skin lesion

Koh-ichi Tamada

Department of Oriental Medicine, Tokyo Metropolitan Ohkubo Hospital

We investigated the effect of six decocted Chinese herbal medicines, Seihi-to, Seihi-to with minor change (Seihi-to-kagen), Shoufu-san, Shoufu-san plus large amount of calcium sulfate, Huang's experienced regimen, and Huang's regimen with minor change in thirty patients suffered from adult-type atopic-dermatitis (AD), which is severe skin lesion spread on whole surface of the body. One adequate Chinese herbal medicine was selected by Oriental Medicine based analysis method for each patient. We chose the AD score to estimate the effect of each Chinese herbal medicine. The AD scores were recorded everyday by each patient and the AD scores before administration of Chinese herbal medicine and those of after administration were compared respectively. The AD scores reduced to below one-second within six months in 6 out of 11 cases (54.5%) with the treatment of Seihi-to, in 6 out of 6 (100%) with Seihi-to-kagen, in 1 out of 2 (50%) with Shoufu-san, in 10 out of 14 (71.4%) with Shoufu-san plus, in 1 out of 1 (100%) with Huang's regimen and in 8 out of 9 (88.9%) with Huang's changed regimen. Finally, skin lesions of 26 out of 28 cases (92.9%) were significantly improved and the dosage of steroid significantly decreased in twenty seven cases (96.4%). Those findings suggested that the adequate Chinese herbal medicines by Oriental Medicine based analysis method might be positively useful as a combination medicine with steroid ointment for anti-severe, hard-to-cured AD

Key Word: adult-type atopic dermatitis, decocted Chinese herbal medicine

成人型・最重症アトピー性皮膚炎(以下 AD と略す)は難治性で、さまざまな治療に抵抗し、短期的には最も有効なステロイド外用剤の長期塗布により、特に顔面を中心に皮膚が薄くなり、かえって発赤が増強したり、突然の休薬によるステロイドリバウンドによって皮膚症状が極端に悪化した例が報告され、ステロイド外用剤使用の是非をめぐって、社会問題までも引き起こしたことは

記憶に新しい。ステロイドという言葉にも拒否反応を示す患者も多く、ステロイド外用剤の使用を拒否し、民間療法を試みて、さらに AD 症状を悪化させる例も数多いと思われる"。当院東洋医学科にもステロイド外用剤、経口抗アレルギー剤などで十分な効果が認められないために、それら以外の治療法を求めて、多数の AD 患者が受診している。このような患者の中で、当院来院後に

さまざまな漢方エキス製剤を投与しても改善が認められず、前じ薬を希望する症例に、中医学前じ薬治療を試み、 その効果を独自の視点から判定し、検討した。

対象と方法

1. 対象

対象は平成 10 年 10 月から平成 14 年 7 月までに、 当院東洋医学科を受診した男性 19 例、女性 11 例、計 30 例である。全例で皮膚科専門医により、成人型・最 重症 AD と診断されている。煎じ薬開始年齢は 20 歳以 下が 5 例、21~30 歳が 16 例、31~40 歳が 6 例、41 歳以上が 3 例、最年少は 15 歳、最年長は 70 歳であっ た。

2. 煎じ薬

煎じ薬は中医学処方から3方剤を選び,できる限り 保険適応生薬での構成とするために、1部の生薬を変更 した加減を創った。

1) 清皮湯" 単位; g

生地黄 10, 丹参, 赤芍薬, 茵蔯蒿, 地膚子, 薏苡仁 各 8, 白术, 当帰 各 6, 黄芩, 茯苓, 梔子 各 5

(赤芍薬は芍薬と読み替えて、保険適応生薬とした)

2) 消皮湯加減

生地黄 10, 赤芍薬 8, 当帰 6, 川芎 5 (以上 四物 湯), 黄芩 5, 梔子 5, 白北 6, 茯苓 5, 茵蔯蒿 8, 薏苡 仁 8, 苦参 6

3) 消風散3)

荊芥 6, 防風 9. 当帰 6, 生地黄 12, 苦参 6, 蒼朮 6, 蝉退 6, 胡麻仁 6, 牛蒡子 6, 知母 6, 生甘草 3, 木通 6, 石膏 12 (先煎)(石膏增量; 30)

(胡麻仁のみが保険適応外である。加減は石膏の増量 のみにとどめた)

4) 黄煌 (南京中医薬大学) 経験方

生地黄 30, 桃仁 15, 柴胡, 生甘草, 阿膠 各 12, 防風, 黄芩, 荊芥 各 10

5) 贵煌経験方加减

茵蔯蒿 8, 荊芥 10, 生甘草 6, 防風 10, 黄芩 10, 苦 参 6, 生地黄 12, 桃仁 15. 阿膠 12 (後下), 麦門冬, 天門冬 各 6

原則として皮膚の赤み、熱感の強い症例に清皮湯(加減)を、かゆみの非常に強い例に消風散(石膏增量)を、皮膚の乾燥で悪化する例には黄煌経験方(加減)をファーストチョイスとし、薬物効果や証の変化にそって、3つの方剤、3つの加減方の中から、煎じ薬を選び直した。

第1表 アトピースコア (AD スコア) の計算方法

A症状 (0;なし, 5;重症)

赤み 頭類部 0~5点 体幹 0~5点 四肢 0~5点 熟感 頭頚部 0~5点 体幹 0~5点 四肢 0~5点 かゆみ 頭頚部 0~5点 体幹 0~5点 四肢 0~5点 湿潤面 頭頚部 0~5点 体幹 0~5点 四肢 0~5点 4項目について、各部位ごとに点数をつけ、合計したものを AD症状指数 (a) とする

Bステロイド外用剤(1;塗布回数)

9イーク群 頭頚部 1×t 体幹 1×t 四肢 1×t ストロング群 頭頚部 2×t 体幹 2×t 四肢 2×t ストロンゲスト群 頭頚部 3×t 体幹 3×t 四肢 3×t ステロイド剤の種類によって、1~3点×塗布回数を、各部位ごとに点数をつけ、合計したものをステロイド外用剤使用指数(b)とする

C 生活度(1;不満足 3;満足)

睡眠 1~3点、食欲 1~3点 意欲 1~3点 生活度を3項目について、点数化したものを、生活度改善指数(c)とする

アトピースコア (ADスコア):a+b-c

ステロイド外用剤は禁止せず、そのまま本人の使用に任 せた、症状の改善に伴って、煎じ薬1日分を2日に分 けて飲む、などの減量を行なった。

3. AD 皮膚症状、ステロイド外用剤使用頻度、量、および生活の質についての点数化(第1表,第1図)

1) AD 症状指数

皮膚の赤み、熱感、かゆみ、湿潤化した皮膚面積の 4 項目を、それぞれの項目別にマイナス 1~5 点を、頭類部、体幹部、四肢について部位別に点数をつけ、合計したものを AD 症状指数とし、毎日、本人がその日の点数をつけることとした。

2) ステロイド外用剤使用指数

ステロイド外用剤を、抗炎症作用、抗アレルギー作用の強さから便宜上3群に分け、ウイーク群をマイナス1点、ストロング群をマイナス2点、ストロンゲスト群をマイナス3点として、ステロイド外用剤を塗布した場合、ステロイド作用の強さの点数に塗った回数を掛け算し、頭頚部、体幹部、四肢について別々に点数をつけ、合計したものをステロイド外用剤使用指数(ステロイド指数)とした、毎日本人が、その日の点数をつけることとした。

3) 生活改善度指数

睡眠、食欲、意欲(学習上、仕事上など)の3項目 について、プラス1~3点を、毎日本人がつけ、生活 改善度指数とした。

第1図 アトピースコア記録

B	1+	症状	部	位 (0	-5)	マイナス 食 欲 合計 (1-3)	意 欲	睡 眠	A 31	使用薬	使用集	ステイロド	
	付	症状	頭首	体	手足	合計	(1-3)	(1-3)	(1-3)	合 計	(飲み)	(塗り)	使用
月		かゆみ											
	Ħ	赤み						ĺ	1			Ali:	ł
		整 縣					1	Ì				:	
		渗出物											į
		かゆみ										***************************************	
П	田	赤み											
月	E) :	熱感											
		渗出物											
	1	かゆみ											
п	-	赤み											
Я	B	熱感										/	
		渗出物											
	- 0	かゆみ											
н		赤み					l.						3 (
月	B	熱感											
		渗出物					Í.			b			

第2図 漢方治療のための質問表

質問	はい	中間	いいえ	点数
①体質は筋肉質ですか	6	3	0	
②かた太りのほうですか	6	3	0	
③皮膚はつやがありますか	8	4	0	
④おなかは弾力的で緊張感がありますか	8	4	0	
⑤食べ過ぎても平気なほうですか	6	3	0	
⑥食事のスピードは速いほうですか	6	3	0	
⑦ 1 日でも便秘をすると不快なほうですか	6	3	0	
⑧暑さ寒さに強いほうですか	6	3	0	
⑨手足の冷えはありませんか(*)	6	3	0	
砂活動的ですか	6	3	0	
⊕あまり疲れないほうですか(*)	6	3	0	
⑫声は力強いほうですか	8	4	0	
₿行動には常に余裕がありますか	8	4	0	
−の日薬は苦いほうが飲みやすいですか	6	3	0	
 	8	4	0	
	合計	点	2.50	

それぞれの項目に点数を記入して下さい

中間:中間の場合と、返事が出来ない場合も入れて下さい *③、①、⑤については「はい」と答えた場合、手足の冷えはない、疲れにくい、寝汗はかかないことを意味しています

4) アトピースコア (AD スコア)

AD症状指数とステロイド指数を合計し、生活改善度 指数を引き算したものをアトピースコア(AD スコア) とした。

今回の調査では、薬剤の有効判定基準は、①ADスコアが薬剤投与前の1/2以下に改善する②治療者から見て、皮膚所見の改善が明確に認められる、の2項目を満たした症例を有効例とした。

4. 虚実判定

虚実判定には小山氏式虚実診断質問表を用いた(第2 図).

5. 高感度 CRP*

AD 患者の皮膚炎症程度の指標として血清中高感度 CRP を 6 例で測定し、煎じ薬治療前後での値の変化を 調査した(症例 13, 22, 25, 26, 29, 30). 同時に AD 患者血清中 LDH 値、末梢血好酸球数も、治療前後の変 化を調べた.

結果

1. AD 思者の初診前、初診時データー (第2表)

30 例の AD 患者について,性別,発病年令,合併症, 皮膚所見,初診前治療薬,効果などを第2表に示した, 発病期は学童期に発症が2例,成人発症が5例,23 例 は乳幼児期から皮膚病変が明確に認められた。合併症では他のアレルギー疾患を 20 例で認めた。当院初診時前の内服薬について、記録の残った範囲で調べ、それらの効果を問診より判定した。ステロイド内服薬、免疫抑制剂内服薬以外で効果有りと考えられたのは、症例 2 の 当帰飲子、黄連解毒湯、症例 21 の梔子柏皮湯、黄連解毒湯、症例 21 の梔子柏皮湯、黄連解毒湯、症例 23 の六味丸、麦門冬湯、消風散、温清飲であった(以上すべて漢方エキス製剤)。抗ヒスタミン剤とステロイド合剤のセレスタミンは 4 例に用いられ、すべて効果不充分であった。強ミノ C やノイロトロピン注射は、かゆみをやや改善した。その他の西洋薬、漢方薬は有効とは考えられなかった。

2. AD 患者初診後データー (第3表)

当院初診時,終診時年月日,初診時年齢,虚実スコア,診察所見,煎じ薬投与前の当院使用薬,煎じ薬名とそれら投与前後のADスコア変化などを第3表に示した.虚実スコアで30以下の虚証は1例,31~40の虚証に近い中間証は10例,41~50の中間証は12例,51~60の実証に近い中間証は5例,61以上の実証は2例であった。当院受診中の煎じ薬前の使用薬では、症例15の黄連解毒湯,温清飲,治頭瘡一方でかゆみの軽度減少を認めた、症例28の十味敗毒湯でみかゆみの軽度減少を認めた、症例28の十味敗毒湯でかゆみの軽度減少を認めた、症例28の十味敗毒湯でADスコアの軽度改少を認めた(以上すべて漢方エキス製剤)。しかしADスコアが1/2以下に減少する(改善する)ような有効例は、いずれのエキス製剤にも認めなかった。

3. 各煎じ薬使用例数と有効率(第4表)

各煎じ薬の有効率を第4表に示した、清皮湯は11例が内服し、6例に有効(54.5%)であった、清皮湯加減は内服した6例全例が有効であった。消風散は2例中1例に有効(50.0%)、消風散石膏増量は13例で14回の内服機会があり、10回で有効(71.4%)(症例12は2回内服)であった。なおプレドニゾロン 20mg/day を1週間連日内服し、引き続き1週間の隔日内服終了後に消風散石膏増量を継続中の症例21、25はAD症状の再悪化を認めないが、今回は統計から除外した。黄氏経験方は1例で有効(症例9)、黄氏加減方は9例で8例に有効であった(88.9%)、煎じ薬内服以前に消風散エキス製剤を使用し、無効であった10例中7例で消風散(石膏増量)が有効であった(70.0%)、症例3、5、20はステロイド外用剤を使用せずに、煎じ薬のみで改善した。また症例19は煎じ薬効果はADスコア上では不十

分であるが、ステロイド使用量は減少し、煎じ薬とステロイド外用剤の相乗効果が認められた。症例 6 では消風散石膏増量は無効であったが、黄氏加減方は有効性を認めた。しかし慢性蕁麻疹が出現し、煎じ薬の副反応によって悪化した可能性が否定できないため、煎じ薬の内服を中止した。その他の症例では煎じ薬の副反応は認めず、連日内服が可能であった。

4. 虚実、瘀血、皮膚乾燥と各煎じ薬有効率(第5表)

虚実スコア、瘀血の程度、皮膚乾燥の程度と各方剤の 有効率を第5表に示した、瘀血は30例全例で認められ たが、ここでは舌診で明らかな静脈怒張を認めるか、皮 膚色が広い範囲で赤黒色、あるいは赤紫色の症例のみを 瘀血(+)とした、同様に皮膚乾燥も湿の強い3例を 除き(症例23,25,26),27例に認められたが、乾燥 が非常に強く、かつ乾燥で症状が悪化する例を、乾燥強 とした、清皮湯は乾燥の強い4例中1例のみが有効で (25.0%)、乾燥の少ない7例では、5例に有効であった

(71.4%)、清皮湯加減は虚実にかかわらず有効率が高いが、特に瘀血(+)で、皮膚乾燥の少ない症例に多く用

いて有効であった。消風散加石膏増量は実証傾向例に有効率が高く、また瘀血(+)で、乾燥の少ない6例中5

例に有効であった (83.3%). 黄氏加減方は虚証傾向群

に多く用い、有効で、また乾燥強6例全例で有効であっ

5. 煎じ薬治療前後の患者血清中高感度 CRP 値, LDH 値, 好酸球数

煎じ薬治療前後の患者血清中高感度 CRP 値, LDH 値,末梢血好酸球数の変化を第6表に示した。検討し た6例全例で、ADスコアの改善、および高感度 CRP 値,LDH 値,好酸球数の減少を認めた。

考 按

AD は日本皮膚科学会、および厚生(労働)省の診断基準があり、重症度分類も広く用いられている^{6,6)}、今回検討した30例はAD診断基準を満たし、また最重症型に属する。AD は原因不明で、特に最重症型はさまざまな治療に抵抗性で、治療に難渋することはよく経験するところである。日本皮膚科学会、および厚生省研究班の治療指針では、中等症以上には副腎皮質ステロイド外用剤が第1選択薬とされ^{6,7)}、筆者も賛同するところである。ステロイド外用剤は、その抗炎症作用、抗アレルギー作用(ステロイド作用)の強さから5群に分けら

tz.

玉田:アトピー性皮膚炎の中医学煎じ薬治療

第2表 AD 患者の初診前, 初診時データー (1998~2002)

NO	性	発病年齢	合 併 症	皮膚色 乾燥度	治療薬 (D:煎じ薬) (D以外はすべてエキス製剤)	効果判定
1)	M	乳幼児期より 27 歳頃から悪化	喘息,アレルギー性鼻炎 結膜炎,直腸脱,イレウス	赤白	シクロフォスファミド ケトチフェン, エメダスチン	効果あり, 副作用出現 効果不十分
2)	M	幼児期より	花粉症	赤白 少	当帰飲子,黄連解毒湯	やや有効
3)	М	乳幼児期より 11 战から悪化	喘息,アレルギー性結膜炎	赤黒	当帰飲子合黄連解毒湯 (D) クロルフェニラミン	あまり効果なし? 効果不十分
4)	M	乳幼児期より	喘息?アレルギー性結膜炎	- 赤白 少	オキサミド、ジスロン	効果不十分
5)	M	乳幼児期より 18 歳頃から悪化	花粉症	赤黒	黄連解毒湯,桔梗石膏 消風散,柴苓湯,茵陳荔湯	効果不十分 効果不十分
					強ミノ C, ノイロトロピン ケトチフェン, エピナスチン	ややかゆみ減少
					クロルフェニラミン、スプラタスト	効果不十分
6)	F	6 歳頃より 19 歳頃から悪化	喘息。慢性ジンマシン 花粉症	赤白 少	抗アレルギー剤 (内容不明)	効果不十分 効果不十分
7)	M	乳幼児期より 20 歳頃から悪化	唱息	 赤黒 少	ジスロン	効果不十分
8)	M	30 歳頃から悪化	なし	赤黄	ケトチフェン、メキタジン	効果不十分
and Article	outli		mas (500	少	ウェン・フェン・ 強ミノ C	ややかゆみ減少
9)	М	乳幼児期より 11 歳頃から悪化	アレルギー性鼻炎、粘膜炎	赤黒	メキタジン	効果不十分
10)	M	乳幼児期より	花粉症	赤黄		効果不十分
				強	抗アレルギー剤 (内容不明)	効果不十分
11)	M	乳幼児期より	喘息,アレルギー性鼻炎	赤黒	黄連解毒湯,十味敗毒湯	効果不十分
	1.2	2217677 2	結膜炎	強	アゼラスチン,クロルフェニラミン	効果不十分
		68 歳から	アレルギー性鼻炎、高血圧症	紫白 中	セレスタミン(1錠/day)	効果不十分
(3)	F	乳幼児期より 出産後に悪化	喘息,花粉症,橋本病	赤黒 少	オキサミド, エメダスチン	効果不十分
14)	F	乳幼児期より	花粉症	赤黄 中	黄連解毒湯、桔梗石膏、当帰飲子 ケトチフェン,エピナスチン,ジスロン	効果不十分 効果不十分
15)	F	幼児期より	なし	紫白 少	治頭瘡一方 ケトチフェン、クロルフェニラミン	悪化 効果不十分
16)	M	乳幼児期より	アレルギー性結膜炎	赤白	オキサミド、クロルフェニラミン	効果不十分
17)	F	幼児期より	アレルギー性鼻炎, 結膜炎 喘息	赤白 中	柴胡清肝湯,柴胡桂枝湯 補中益気湯,消風散,荊芥連翹湯	悪化 効果不十分
(8)	F	乳幼児期より 30 歳頃から悪化	なし	赤黒 中	トラニラスト, セレスタミン	効果不十分
19)	F	乳幼児期より 18 歳頃から悪化	花粉症	赤白 少	当帰飲子,補中益気湯 柴胡清肝湯	効果不十分 効果不十分
20)	M	26 战頃から悪化	花粉症	· 赤白 少	アレンドロン、セレスタミン	効果不十分 効果不十分
21)	F	21 歳頃から悪化 28 歳時ステロイド	なし	メ 紫白 中	梔子柏皮湯,黄連解毒湯	有効
201	N.A	外用剤中止後悪化	₹5.1	-1.01 a.	~7* gri	
		6 歳頃より悪化 乳幼児期より 26 歳頃から悪化	なし 統合障害	赤黒,少赤黒	不明 六味丸,麦門冬湯,消風散,温清飲	やや有効
24)	M	20 成頃から悪化 20 成頃から出現 32 歳頃から悪化	なし	混亦白	桔梗石膏	効果不十分
25)	F	32 成頃から悪化 幼児期より 30 歳頃から悪化		少 赤白	セレスタミン ステロイド内服 **たぎ(中央ア四)	効果不十分 有効(中止後再発)
26)	F	30 威頃から悪化 幼児期より 27 歳頃から悪化	アレルギー性鼻炎	湿 赤黒	漢方薬(内容不明) ビタミンC 滋力薬(中容不明)	効果不十分 効果不十分
7)	м	幼児期より	アレルギー性結膜炎	湿地	漢方薬 (内容不明) エ明	効果不十分
8)		初光期より 53 歳頃から出現	実冷ジンマシン	赤白,強	不明 温清飲,当帰飲子	やや有効?
29)	M	幼児期より	なし	強 赤黒	温消飲,桔梗石苷	効果不十分
(0)		幼児期より 26 歳頃から悪化	なし	強 赤黒 少	荊芥連翹湯, 当帰飲子 十味敗毒湯	効果不十分 効果不十分

第3表 AD 患者の当院初診後データー (1998~2002)

	Liver Search Section (1997)					X AD 混石のE	1950~2002)		
	初診年月日 終診年月日	年 舲	成 実 (スコア)	舌 診	脉 診	股 診	煎 じ 薬 投 与 前 薬 (エキス製剤)	煎 じ 薬 (開始年月、判定年月)	AD スコア変化
1)		34	42	赤紫色	やや細で数	腹直筋緊張	治頭瘡一方,白虎人参湯,温清飲	清皮湯 ('99.3~5)	45⇒<20
	'02 . 2. 1			舌苔少		臍下部軟弱	黄連解毒湯、越蜱加朮湯 オキサミド、エピナスチン	清皮湯加減('99.5~11)	<20⇒<10
2)	'98.12.18 '99. 8. 2	20	59	赤紫色 舌苔少	中、数 やや浮	腹直筋緊張 臍下部軟弱	黄連解毒湯 スプラタスト	荷皮湯('99.3~4)	35⇒<10
3)	'99. 1. 6	21	59	赤色 舌苔少	実	腹直筋緊張	白虎加人参湯,越婢加朮附湯 黄連解毒湯	清皮湯('99.3~8) 消風散('99.9~12) 黄氏加減('99.12~'00.5)	45⇒35~40 35~40 40⇒15
4)	'99. 1.20 '99. 4.25	19	34	赤色	やや細で数	腹直筋緊張 隨下部軟弱	白虎人参湯,越婢加朮附湯 黄連解毒湯	清皮湯('99.3~5)	30⇒8
5)	'99. 3.31	28	66	赤紫色 舌苔少	実	腹直筋緊張 臍下部軟弱	温清飲、着連解毒湯	清皮湯加減 ('99.4~10) 消風散石膏增量 ('00.3~6)	30⇒15 15⇒<10
6)	'99. 5.25	29	46	赤色 白舌苔	中, 数	特記すべき ことなし	白虎人参潟、消風散、治頭瘡一方 黄連解毒湯、オキサミド クロルフェニラミン、スプラタスト	消風散石膏増量('01.1~2) 黄氏加減('01.2~6) (ジンマシン出現で煎じ一時中止)	38⇒22 22⇒<20
7)	'99. 5.31 '01.12.19	24	39	赤紫色 舌苔少	やや細で数	腹直筋緊張 臍下部軟弱	黄連解毒湯、消風散	消皮湯('99.6~7) 消風散('99.7~10) 消風散石脊增量('99.10~12)	45⇒<40 45⇒20 20⇒<10
8)	99. 7. 5 00. 5.29	30	56	赤色 舌苔少	中,数	股直筋緊張 臍下部軟弱	黄迎解海湖。白虎人参湖	消風散石膏增量('99.8~'00.2)	45⇒<8
9)	'99. 9.28	30	30	赤紫色 舌苔少	やや細、数	敗直筋緊張 臍下部軟弱	黄連解毒湯、メキタジン オキサミド (悪化)、クロルフェニラミン	消皮湯('99.11~'00.2) 黄氏経験('00.2~6) 黄氏加減('00.6~12)	45⇒35 35⇒23 23⇒<15
10)	'99.10.12 '01. 9.19	26	34	赤紫色 舌苔少	やや細,数 やや浮	腹直筋緊張 臍下部軟弱	黄連解毒湯	清皮湯 ('99.11~'00.6) 黄氏加減 ('00.6~9)	30⇒15 15⇒5
11)	'99.10.26 '00.10. 1	31	58	赤色 白舌苔	実. 数	腹直筋緊張	白虎人参湯,越婢加朮附湯 黄連解毒湯	清皮湯('99.3~6) 消風散石育增量('99.9~'00.1)	40⇒25 25⇒<20
12)	'00. 5.23 '01. 1.12	70	32	赤紫色 舌苔少	やや細、数	小腹不仁	温清飲,黄連解毒湯	消風散石膏均量('00.6~7) 消風散石膏均量('00.9~10) 黄氏加減('00.10~'01.1)	28⇒2 30⇒30 30⇒6
13)	'00.12. 6	41	34	赤紫色 静脈怒張	やや細、数	臍下部軟弱	温滑飲、黄連解毒湯 オキサミド	清皮湯加減('00.1~6)	35⇒<10
14)	'99. 3.10 '99. 6.17	26	36	赤色	やや細、数	脐下部恢弱	温清飲、黄連解毒湯 クロルフェニラミン	清皮湯('99.3~5)	30⇒10
15)	'99. 3.16 '99. 7.21	18	46	赤色白舌苔	中, 数	臍下部軟弱	黄連解毒湯(発赤やや軽減)	清皮湯('99.4~6)	30⇒15
16)	'99. 5.26 '99.11.15	21	36	赤色 舌苔少	やや細、数	敗直筋緊張 臍下部軟弱		清皮湯('99.5~9)	30⇒25
17)	01. 2.13	15	46	赤色 舌苔少	やや細、数	敗直筋緊張	黄連解毒湯,温清飲,治頭瘡一方 (すべてかゆみやや軽減)	消風散石膏增量('01.5~8)	30⇒15
18)	'02. 4.22	30	46	赤色 白舌苔	やや 笛	特記すべき こと無し	黄連解毒湯。 消風散	消風散石膏增量('02.5~9)	27⇒<10
19)	'01.10.29	25	46	赤色 舌苔少	中,数	腹直筋緊張	黄連解毒湯,消風散 十味敗毒湯	消風散石膏增量('02.5~7)	30⇒25

20) 21)	'02. 1.22 '02. 4.15	35 30	46 45	赤紫色 赤紫色 静脈怒張	中, 数 中, 数		腹直筋緊張 腹直筋緊張 臍下部軟弱	消風散	消風散石膏増量('02.3~8) 黄氏加減('02.4~5) ブレドニゾロン(2週間内服) 消風散石膏増量('02.5~9)	35⇒15 52⇒32⇒48 48⇒<5 ~<10
22)	'02. 5.22	24	62	赤紫色 舌苔少	実. 緊		腹直筋緊張	消風散、桔梗石苷	消風散石膏增量('02.7~9)	40⇒10
23)	'02. 7. 8	23	44	赤紫色 白黄舌苔	中,数		腹直筋緊張		治皮湯加減('02.7~9)	25⇒<10
24)	'02. 7.23	34	42	淡赤色	中、数		腹直筋緊張		消風散石膏增量('02.7~9)	42⇒<10
25)	'02. 2.18	31	38	赤色 灰色舌苔	細,数		胺直筋緊張		ブレドニゾロン(2週間内服) 消風散石膏増量('02.2~8)	35⇒<5 ~<10
26)	'02. 6.25	28	32	赤色 舌苔少	細,数		腹直筋緊張		清皮湯加減('02.6~9)	40⇒<10
27)	'01. 8.29	17	50	赤色 舌苔少	ιţ		腹直筋緊張	消風散	消風散石膏增量('01.9~11) 黄氏加減('01.9~'02.8)	30⇒25 25⇒15
28)	'99. 8.25	54	36	赤紫色 舌苔少	細、数		脖下部軟弱	十味敗毒湯(やや有効)	黄氏加減('02.6~9)	30⇒15
29)	'02. 8.19	37	44	菏紫色 舌苔少	やや細		腹直筋緊張	消風散	黄氏加減('02.8~9)	30⇒15
30)	'01. 4.23	27	54	赤色 舌苔少	やや細, 沈	数	腹直筋緊張	消風散,黃連解毒湯 40⇒35	消皮湯加減('01.5~8)	35⇒15

第4表 各煎じ薬使用例数と有効率 (1998~2002)

使用例数

有効例数

有効率 (%)

黄氏加减		消風散石膏物量
9	1	14
œ	-	10
88.9	100	71.4

消皮湯加減 消皮湯 消風散

54.5 50.0

れるが、それらを"強いステロイド、弱いステロイド"

数字で表わされることは、患者自身の治療の励みにもなっ が得やすい方法の1つと思われた。皮膚症状の改善が い、客観的性のある方向へ導かれると考えられる. AD れ-30~-40 点であり、あまり個人差が認められなかっ に、皮膚症状が一番悪い時期の AD スコアは、それぞ 去の比較は、客観性があると考えられる、興味深いこと 1時点のみでは主観的な記録、点数化ではあるが、1個 投薬の内容、使用法などの理解を深めたと考えられる。 インフォームドコンセントが重要と思われる。AD スコ がどのように感じ、理解するか、といった心理学的配慮。 がためらわれる、あるいは"弱い"外用剤は安全性が高 副反応のそれと誤解された場合、 る. "強い、弱い"はステロイド作用の強弱ではなく、 と患者に説明することは、患者の誤解を招く可能性があ 季節の影響が大きいと判断し、AD 症状指数に含めなかっ たと考えられる。今回の調査では皮膚表面乾燥状態は、 ある。ADのような慢性、難治性疾患に対しては、患者 るだけではなく、治療者も理解しやすくなり、共通理解 スコア記録は患者が、現在の自分の皮膚状況理解を深め るが、毎日記録することで、スコアはより個人差の少な た、AD スコア記録はそれぞれの個人の主観で行なわれ 人の長い時間経過記録の中では,1個人記録の現在と過 アを毎日、患者自身に記録していただいたことは、病気、 と誤解されて、長期に、 漫然と使用される危険性が "強い"外用剤の使用

AD は激しい皮膚炎が存在するにもかかわらず、CRPは 0.32mg/dl 以下の正常値であることが大多数である。他の血滑中の炎症マーカーも正常範囲で、AD 皮膚症状、所見以外には、炎症程度の指標に乏しい、今回 6 例ではあるが、煎じ薬治療前、治療 3 ヶ月以上経過後で高感度 CRP 値を測定し、全例で高感度 CRP 値を測定し、全例で高感度 CRP 値を測定し、全例で高感度 CRP は、AD スコアも全例で 1/2 以下に改善しており、高感度 CRP は、AD 患者血滑中炎症マーカーの 1 つとして有用と考えられた、患者血滑中 LDH 値、末梢血好

虚実スコア		<4	0			41~	-50		51 <				
瘀 血	ie.	+				+		-	+				
皮膚乾燥	強	低	強	低	強	低	強	低	強	低	強	低	
清皮湯加減		2/2 (100) 1 例は湿				2/2 (100) 1 例は湿			1/1 (100)	1/1 (100)			
消皮湯	1/2 (50.0)	1/2 (50.0)		1/2 (50.0)		2/2 (100)			0/2	1/1 (100)			
消風放		1/1 (100)		3		3.5755			0/1	(111)			
消風散石矿增量		2/3 (66.7)				2/2 (100)	0/1 (0)	2/4 (50)	2/2 (100)	1/1 (100)		1/1 (100)	
黄氏経験方	1/1 (100)					######################################	0.0000			3550			
黄氏加減	3/3 (100)	1/1 (100)			1/1 (100)	0/1 (0)	1/1 (100)	1/1 (100)	1/1 (100)				

第5表 虚実、瘀血、皮膚乾燥と各煎じ薬有効率(%)(1998~2002)

第6表 AD患者血中 CRP, LDH, 好酸球数の煎じ薬治 療前後変化

es 100	CI	RP	LI	DΗ	好酸球数		
症例	前	後	前	後	Ĥij	後	
	ng/ml	ng/ml	IU/ml	IU/ml	個/ul	個/ul	
13	543	378	223	167	519	192	
22	2490	256	418	254	1445	493	
25	2170	399	457	350	296	200	
26	430	135	415	341	3108	1600	
29	190	90	319	211	672	259	
30	1600	230	599	308	4473	829	

酸球数も AD 症状軽快とともに、6 例全例で低下しており、高感度 CRP とともに AD 症状改善の、患者血液中の指標の1つになると思われた。

AD治療に漢方エキス製剤の効果が乏しかったことから、煎じ薬を積極的に取り上げた。ADに通常用いられる方剤は、大きくは温清飲系と消風散系に分けられるが、それらに加え皮膚乾燥改善を主目的とした煎じ薬を削り、それぞれの効果を比較した。消皮湯では全体として涼肌、渗水作用を持ち、重症型尋常性乾癬に用いて著効を認めたことから、乾燥性 ADにも有効ではないかと考え、AD治療薬として取り上げた。期待に反し虚証、実証共に効果不十分例が多く(有効 6:効果不十分 5)、乾燥の強い例では 25.0% の有効率であった。症例 16 の煎じ薬治療継続不能の原因が、保険適応外生薬の使用(自己負担)であったことから、加減を削った。加減は

丹参を川芎に置き換えて四物湯の方位とし、地膚子を苦 参に変更したが、予想以上の効果であった。全体として 温清飲系の方剤で、中間証で瘀血の強い症例に用いると よいと考えられるが、清熱利水作用の地間子が、止痒作 用は強いが清熱乾燥作用も持つ苦参に置き換えられたこ とは、より乾燥の少ない AD に適していると考えられ る. 湿熱の強い症例 23, 26 には著効を示した. 消風散 は症例7で石音増量により、著効を認めたために、主 に石膏増量で処方した。AD に桔梗石膏の有効性が認め られており*1、石膏量は加減できることが望ましい。こ の意味でも煎じ薬は有用と考えられる。消風散エキス製 剤無効 10 例中 7 例で煎じ消風散(石膏増量)が有効で あり、生薬量の多寡による効果の違いと考えられた。消 風散有効例は実証傾向群に多く、また瘀血(+)で皮膚 乾燥の少ない症例で有効性が高いと思われた。黄氏経験 方は南京中医薬大学教授、黄氏の創作であり、主に皮膚 乾燥の強い AD に用いられる。この方剤には阿膠が含 まれ、皮膚表面の乾燥を改善するが、柴胡が含まれてお り、"柴胡で清熱すると燥清による傷陰が表れる恐れの ある場合には茵蔯蒿で代用する""とあるため、加減方 を削った、麦門冬、天門冬も加え、滋陰効果を強めるこ とによって、加減一陰煎亀板膠石膏10に相当する方剤を めざした。陰証傾向患者群では4例全例に有効で、主 に中間から陰証で、乾燥の強い例に用いる方剤と思われ た、症例 12 は平成 12 年 6 月、7 月に消風散石膏増量 で著明に改善したため来院せず、治療が中断したが、同 年9月に再発し、今度は消風散石膏増量では改善せず、

黄氏加減方に変更して改善した。9月からは皮膚の乾燥を訴えており、季節による皮膚表面の証の変化と考えられた。ADの3方剤の選択基準として、今回の結果より、虚熱乾の例には黄氏加減、虚熱湿には清皮湯加減、虚寒乾には黄氏加減、虚寒湿には清皮湯加減、実熱乾には消風散石膏増量、実寒乾には黄氏加減、実熟湿も消風散石膏増量、実寒乾には黄氏加減、実寒湿には清皮湯加減が推奨されると思われた。

AD の証は非常に難解であるが、中医学的には栄気や 衛気の不足、瘀血、津液不足、あるいは過剰の入り混じっ た状態が皮膚表面に表出したものと考えられる。皮膚表 而の色調の悪さは、脾胃の虚からの栄気不足が考えられ、 また AD の皮膚にはブドウ球菌やヘルペスウイルス感 染症が多いことは、衛気不足が考えられる、 小児期には 食事アレルギーによると考えられる AD が存在するが、 これらも栄気、あるいは衛気不足としても理解でき る"1.12)。ステロイド外用剤長期塗布は皮膚の瘀血状態を 悪化させる。 さらに症例 1, 4, 7, 9, 10, 12, 13, 14. 16. 26. 28 の 11 例は、やせて虚弱でのどが渇き、 舌は赤く、舌苔は少なく、脈は細で数と、中医学的には 腎陰虚もあると考えられた、症例 7 で 3 カ月間、煎じ 薬消風散と六味丸エキス製剤を同時に服用したが、相乗 効果は認めず、石膏増量によって改善した、漢方医学的 診察では、腹証で臍下部の軟弱を認める例が多かった。 症例 12、28 は小腹不仁と考えられたが、その他の例で は軟弱の説明が困難であった。 AD は中医学的にも、漢 方医学的にも、何らかの虚の存在が背景にあり、それに よって発症し、また悪化する可能性が考えられた13%

ADは難治性で、いくつもの病態が混在し、病態理解が困難で、煎じ薬で生薬量を加減したり、いくつかの方剤を組み合わせたりしなければ、効果をあげることは難しいと思われた。ステロイド外用剤は依然として AD治療のファーストチョイスではあるが、有効性の高い漢方煎じ薬とステロイドの併用療法は、相乗効果により、ステロイドの必要期間や必要量を減じる可能性が示され、積極的に試みるべき治療法と考えられた。

結 語

1. 30 例の成人型・最重症型 AD 治療のために中医学処方から、温清飲系の清皮湯 (加減)、消風散 (石膏 増量)、および滋陰効果の強い黄氏経験方 (加減)を選び、煎じ薬として内服治療した。

- 2. アトピースコア (AD スコア) を考案し, AD 症状の重症度, ステロイド外用剤の使用状況, および日常生活の QOL を客観的に数字化し, 同一患者の経時的変化を記録した.
- 3. 28 例中 26 例で、いずれかの方剤内服により、AD スコアが 6ヶ月以内に 1/2 以下に減少した(著明改善)。 患者血清の高感度 CRP 測定を 6 例で行ない、煎じ薬内服治療前後で、6 例全例に CRP 値の低下を認めた、難治性 AD 治療に、煎じ薬治療が有用であることが客観的に示された。

4. ステロイド外用剤と煎じ薬の併用療法は積極的に 薦められる。

煽文

- 竹原和彦:アトピー性皮膚炎の民間療法・アトピービジネスの実態。日本医事新報、3966:22-28,2000
- 2) 張瑞栄:新編·中医学 (基礎編). 源草社, p106, 1997
- 3) 伊藤 良、山本 巌:中医学処方解説、神戸中医学研究 会編、医歯薬出版、p304-306、1982
- 4) 斗成陽子, 千田美智子, 小山富子, 小山田, 斎藤憲祐, 市原清志, 河合 忠: 潜在異常値除去法による高感度 CRP 測定法のための CRP 基準値設定の試み. 臨床病理, 49:178-182, 2001
- 5) 日本皮膚科学会「アトピー性皮膚炎の定義・診断基準」、 日皮会誌、104:1324、1994
- 6) 山本昇社:アトピー性皮膚炎の診断基準および治療ガイドライン (案) の作成,平成8年度厚生省長期慢性疾患総合研究事業アレルギー総合研究, 125-130, 1999
- 7) 川島 眞、流川雅弘,中川秀巳,古江増隆,飯島正文,飯塚一,伊藤雅章,塩原哲夫,竹原和彦,玉置邦彦,宮地良樹,橋本公二,吉川邦彦:日本皮膚科学会編「アトピー性皮膚炎治療ガイドライン」,日皮会誌,110:1099-1104,2000
- 8) 藤原二郎、福田みどり、井上佳子、斉藤佳子: アトピー 性皮膚炎-ステロイドからの離脱と石膏の効果. 日本東 洋医学雑誌, 52:507-514, 2002
- 9) 伊藤 良:漢薬の臨床応用,中山医学院編(神戸中医学 研究会訳・編). 医歯薬出版,p141-143,1979
- 10) 塩谷雄二, 寺澤捷年, 喜多敏明:成人型アトビー性皮膚 炎の漢方治療. 日本東洋医学雑誌,50:673-681,2000
- 11) 石井正光: 食と漢方薬による難治性アトピー性皮膚炎の 漢方治療。日本東洋医学雑誌, 51:978-996, 2001
- 12) 有田昌彦: 食物アレルギーの原因と食事療法, 栄養管理 の研究, 18:211-269, 1991
- 13) 岡部俊一:アトピー性皮膚炎の漢方治療-アトピーの本体は皮膚の陰虚、日本東洋医学雑誌、51:973-996、 2001